

Yabea040707

なぜ彼等は、活動の地を海外へ求めたのか

イラク人質事件と今後の国際貢献

矢部昭仁（国際学部国際文化学科 1 年）

はじめに

アメリカによるイラク侵攻・占領からちょうど1年が過ぎた2004年5月7日、単独でイラク入りしていた日本人3名が誘拐された。犯人グループは、自衛隊の撤退を要求、聞き入れられない場合3人を殺害するという声明を出した。しかし、幸いにも日本政府およびイラク聖職者協会の説得などにより、3人は一週間後無事開放された。

人質になった3人のイラク入りの目的はそれぞれ違っていたが、その根底にあったものは、何の罪もないイラクの一般市民を助けたいという想いだった。にもかかわらず、日本国内では3人のとった行動について、無責任・迷惑という批判や自作自演説まで流れ、非難の嵐が吹き荒れた。その一方で、フランスの新聞ルモンドは、「日本人は、人道主義に駆り立てられた若者を誇るべきなのに、政府や保守メディアは解放された人質の無責任さをこき下ろすことにきゅうきゅうしている」と、人質になった3人に対する対応を批判した。またパウエル米国国務長官も「危険を冒すものがいなければ、社会は進歩しない」と慰めの言葉を贈った。このまったく正反対の二つの反応は、今の日本人と欧米人との国際貢献への理解度の違いをよく表している。そんなことから、事実関係を整理し、もう一度人質事件をきちんと考える必要性を感じたのである。なぜ多くの日本人は、彼らを温かく迎えることができなかったのだろうか。また、危険を顧みず彼らを危険な戦地に行かせたものは果たしてなんだっただろうか。以下、人質事件から彼らの動機や目的を考察すると同時に、今後の国際貢献の有り方を検証してみたい。

イラク人質事件の検証

今回のイラク人質事件でバッシングされた3人と日本政府の関係を、わかりやすくたとえてみる。新幹線(日本政府)が、ある目的地(自衛隊によるイラク人道支援)に向かって走っている。そこへ3人の若者(民間人による人道支援)が、勝手に線路に入ってしまった。幸い大事には至らず、3人は無事救出されたものの、目的地到達の妨害だという非難を浴びる。しかし、実は「イラク市民」という子供が、線路に迷い込んで轢かれそうになっていてそれを何とかしたいという思いで3人は線路に入ったのであった。つまり新幹線の目的地も3人が線路に入った理由も、根本的には同じ目的を持っていたのである。走行中の新幹線には見えない「イラク市民」という子供も、自分の足で歩いている3人には良く見えたのだ。

日本政府は、「彼らのとった行動は、何の装備もせずに危険な山に登るようなもので、山岳遭難の場合と同じように救出費用を支払うべきだ」と主張した。しかし、これも良く考え

るとおかしな論調だ。というのも、山に登るのはあくまで個人の自己満足がその目的であるのに対し、国際貢献はたとえ自己満足があったとしてもそれはあくまで付随的なもので、その行動の出発点は困っている人々を助けるという人道支援の精神から始まっている。つまり行動の目的がまったく違うのである。また、自衛隊のイラク派遣はイラク特措法で決まった「国策」だから容易に変更することはできない、と主張する者もあった。しかしそれならば、自国民の人命尊重も憲法第 13 条で定められた立派な「国策」のはずであろう。²⁾この点を考えると、人質になった 3 人の不注意をたしなめこそすれ、「自己責任」などという言葉で彼らを非難すべきではなかった。なぜならば、イラク特措法で自衛隊を派遣したこと自体違憲の疑いが濃い以上、優先されるべきは「人命尊重」の方なのは明らかだからである。

日本人海外渡航の問題点

とはいえ、確かに日本の若者が単身海外で活動する際、いくつかの問題点があるのも事実である。

まず、平和な国日本人特有の自己中心主義や認識の甘さがある。今回のイラク国内の混乱時にもイラクに入国し、滞在し観光をしている者もいた。そしてその中には何の目的もなくただ「帰ったら、みんなに自慢できる」と入国するものもいたと言う。³⁾ 彼等は、単純に一個人として旅を楽しんでいたのかもしれない。しかし、国外にあっての彼らの行動は、「自身」の行動だけでなく、「日本人である」彼らの行動とみなされることが多いものだ。そしてこのような軽率な行動が、一方できちんとした目的をもっている者と同一視され、あらぬ誤解が生まれてしまう危険性を孕んでいるのである。

また、情報収集能力の問題もある。海外渡航するほとんどの日本人はいまだ英語でコミュニケーションを十分にとることができない。たとえ現地に入る前に念入りに情報収集をしたとしても、現地の生の情報にまさるものはない。海外で何らかの活動をしようとするものにとって、英語のコミュニケーション能力の欠如は、そのまま安全確保の成否にかかわるだろう。

さらに、70年代・80年代に生まれた若者は、バブルの真っ只中で育てられている。したがってどうしても、日本と他国との経済観念・金銭感覚などの格差を身にしみて感じられないことが多いのではないだろうか。そのため現地の人たちから反感を買う事もあるだろう。

保険の問題もある。通常海外へ行く場合、万が一のトラブルのために保険に加入する。だが、一般の海外渡航傷害保険の普通約款には、トラブルが戦争危険による場合、すべて「免責」になっているので、たとえ加入していたとしても保険金は支払われない。また戦争危険を担保にするには「戦争危険担保特約」をつけなければならないのだが、事実上保険会社が引き受けることはない。つまり、個人で危険地帯に行こうとしたら保険を掛けることもできないのだ。⁴⁾海外ボランティアという目的で渡航しても、トラブルに見舞われた場合の対処をしっかりとしていなければ、ボランティアという目的が達成できないばかりか、現地の人の手まといにさえなりかねない。

海外渡航の魅力

しかしながら、ボランティアに限らずいろいろな目的のために世界各国に渡航する若者たちは年々増加している。ボランティア活動を目的にイラクへ入国した高遠直子さんへの批判で多かったのは「日本にも大勢困っている人がいるのになぜわざわざ海外へ行かなければならないのか」ということだった。⁵⁾危険というリスクを抱えながらもなぜ彼等は海外を目指すのだろうか。

第一に一攫千金を狙う「野心」が挙げられるかもしれない。たとえば、昨年のイラク戦争取材したジャーナリストが3人も、日本版ピュリッツァー賞ともいえる「ボーン・上田記念国際記者賞特別賞」を受賞している。⁶⁾つまり戦場は、無名のジャーナリストが一躍有名になれるチャンス秘めているのだ。また、人が入りたがらない危険地帯に滞在することで、テレビやラジオ局からの出演以来が舞い込むこともある。そしてそれによって、かなりまとまった収入を得ることも可能なのである。⁷⁾

第二に、不幸な目に遭っている人を見捨てて置けないという「使命感」があるだろう。人質になった3人が、イラク入りした目的はそれぞれ違うものの、3人ともしっかりとした使命感を持っていた。彼等は、命を奪われるかもしれないという恐ろしい経験をしたにもかかわらず、帰国後の記者会見でそれぞれ、「イラクで何が起きているかを知らせることが私たちの使命だ」「こんな経験をしてやはり、今のイラクには民間の人道支援が必要だと思う」「今すぐにでも、また現地へ飛びたい」などと述べ、軽はずみな気持ちで行なった行動ではないことを示した。⁸⁾

そして第三は、やや人間の内面の領域になってしまうが、海外という非日常を生きることによって、自分の存在の意味を問いかける「自分探し」という目的も現実的にあるのではないだろうか。人質事件の被害者の一人高遠直子さんが事件前に出版していた、彼女の海外ボランティアの活動記録ともいえる本がある。⁹⁾「生きる意味を探す旅の途中で」というサブタイトルのついたその本のテーマといえるものは、「愛する」ことの意味、「平和な世界」とはの定義である。彼女は、アジア各地でボランティア活動をしなが、このテーマをずっと考えつづける。というよりは、このテーマを考えるためにボランティア活動をしていたような感じすらある。実際に海外へでると、日本では想像もできないような生活をしている人たちを目の当たりにしたり、日本で考えられている常識・非常識の価値観がまったく逆転していたり、恐ろしく長い時間一人で過ごすことになったりと、いやがうえにも多くのことを考えさせられ、自分と向き合うことが多くなる。その意味で、せわしない日本の日常に違和感を抱き、しっかりと自分と向き合ってみたいと思う人が、その手段として海外で何かをしてみたいと考えることは、決して不思議なことではない。

これからの海外における活動のあり方

以上、イラク人質事件の被害者を通して海外での活動の動機や問題点またその魅力を見てきた。最後に、これらのことを踏まえて今後の国際貢献のあり方を考えてみたい。

イラクではアメリカによる占領が長引くにつれ、テロリストの標的が軍や政府関係者から民間人やジャーナリストにまで広がった。そんな中で自分たちの安全を確保しなければ、人道支援も成り立たないという現実を考えると、そのような危険な地域に単独で行くということは、基本的には自制しなければならないだろう。仮に活動しなければならない場合でも今後は、現地で活動する NGO とのしっかりとした協力関係を構築することが何より重要になるだろう。実際に、人質事件後 NGO 側もこれまでの安全対策の不備を認識し、各団体が様々な対応策を検討し始めている。たとえば、関西 NGO 協議会(30 団体加盟)は、これまで議論されてこなかった共通の安全マニュアルの整備に着手している。また、アジアボランティアセンターではスタディーツアーと題し、ボランティアに関心のある者に 2 週間現地で一緒に活動できる場所を提供したりもしている。さらにアメリカのある NGO などは、世界 37 カ国の国々にスタッフを置き、現地の生活習慣を重視し、他の国からボランティアに参加する者は、現地スタッフの指示に従わせる。そして安全確保の連絡網に、携帯電話・インターネット・衛星電話を積極的に活用し、通信が届かないような地域は、人づてで安全情報を知らせることができるようネットワークを張り巡らせるという徹底ぶりである。個人的に海外に出て活動をしようとする者は、これらの団体と積極的に情報交換をし、まず自らの安全を第一に考えることが大切となろう。

そしてもうひとつは、我々日本人一人一人の国際貢献への理解をもっと深めることだ。今回の人質事件へのバッシングも、根本的には欧米諸国に比べ我々日本人の、NGO や人道支援に対する理解の足りなさから端を発しているように思われてならない。よって、政府や民間の組織が積極的に、これらの啓蒙活動をする必要があるだろう。

最後に、国連ではしばしば NGO のことを「市民社会」と訳することがある。こんなところにも、国としての枠を壊し我々一人一人が同じ地球市民としての同土意識持とうという願いが込められているようだ。国際社会は、もはや国の集まりではなく国家だけで動かせる世界ではない。これからは国連・NGO・そして我々一人一人が、国際社会に必要な役割を分担し、お互い助け合い、認め合うことが国際貢献活動を安全かつ効果的に実行する鍵になるだろう。¹⁰⁾

< 参照サイト及び資料 >

- 1) wysiwyg://345/http://headlines.yahoo.co.jp
- 2) <http://www.yorozubp.com/0405/040521.htm>
- 3) http://www.tokyo-np.co.jp/00/tokuho/20040417/mng_tokuho_000.shtml
- 4) 株式会社 エス・エイチ・ジェイ <http://www.til.co.jp>
- 5) <http://www.amazon.co.jp/exec/obidos/ASIN/4835540743/qid%3D1088985047/249-7096921-2833121>
- 6) http://www.tokyo-np.co.jp/00/tokuho/20040417/mng_tokuho_000.shtml
- 7) 新潮 45 イラク戦下の激安ジャーナリストたち 大川豊 2003/6 月号

8) <http://www.creative.co.jp/top/main2040.html>

9) 高遠菜緒子著「愛してるって、どういうの？」2004年4月26日第5刷発行より

10) NHK 第一放送土曜ジャーナル 2004年6月26日放送より